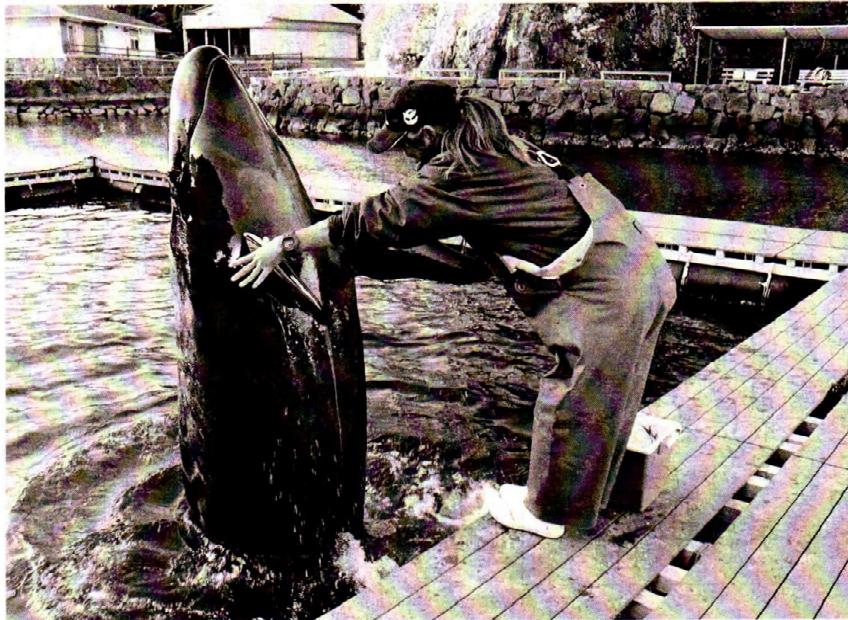


防寒着に身を包み、くじらの世話をする飼育員=太地町立くじらの博物館



## くじら日記

太地町立博物館から

# 分厚い脂肪層に断熱効果

## クジラの寒さしのぎ方

1月上旬は全国的な寒波に見舞われ、くじらの博物館（太地町）内もつっすら雪が積もるなど、本格的に冬を迎えるました。イルカショーステージは凍り、飼育スタッフが足を滑らせることもあります。朝一番に、海水やお湯でステージを溶かす作業が日課になりました。

また、寒空の下、水仕事が絶えない飼育スタッフの手はかじかみ、しもやけにも悩まされます。特に冬の洗札を受けるのが、12度近くまで下がった水中での作業です。空気中の20倍以上も熱を奪うため、あっという間に体が冷えます。さて、私たちには耐えがたい冬の海で、哺乳類であり恒温動物のクジラは、どのように

見舞われ、くじらの博物館（太地町）内もつっすら雪が積もるなど、本格的に冬を迎えるました。イルカショーステージは凍り、飼育スタッフが足を滑らせることがあります。朝一番に、海水やお湯でステージを溶かす作業が日課になりました。

透明のストロー状で、これも空気を含みやすい構造をしています。さらに、透明の体毛と黒い肌は、太陽光の熱を効率的に利用できます。

残念ながら、クジラは体毛を持ちませんが、それに代わるのが表皮の下の脂皮と呼ばれる分厚い脂肪層です。エネルギーを貯蔵するだけではなく、断熱効果があり、ウエットスーツのような役割を果たしています。そして、心臓を通り温まつた動脈と、体の末端を通り冷えた静脈が並走する特殊な血管構造は、熱を失

にして寒さをしのぐのでしょうか。同じ海生哺乳類のラッコは、大量の体毛をもち、そこに空気の層をつくり、体温が逃げないようにしていま

す。ホツキヨクグマの体毛はこの優れた保温構造をもつてしても、寒さを苦手とするクジラもいます。当館ではマダライルカとシワハイルカで、太地の冬の海は少々こたえるようです。水温調節ができる水槽に移したり、餌にビタミンを加えたりして、越冬のお世話をしています。

身一つで、冬の海さえ生活の場に選んだクジラのたぐましい生き方に感心しつつ、私はとてもまねできないと防寒着に身を包んで冬を過ごすでした。

（太地町立くじらの博物館  
副館長 稲森大樹）